イントロダクション 本研究で導入する模型 SUSY SSB と NG フェルミオン 開放端条件での厳密解 まとめ・今後の展望 超対称格子 Majorana 模型における 超対称性の破れと厳密な基底状態 - kink \mathcal{E} skink

TΡ

YUKAWA INSTITUTE FOR THEORETICAL PHYSICS

三浦憂 共同研究者: 戸塚圭介、下村顕士

京大基研

August 25, 2023



Center for Gravitational Physics and Quantum Information Yukawa Institute for Theoretical Physics, Kyoto University

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00000	0000	oooo	000	0000
目次				

- ② 本研究で導入する模型
- ③ SUSY SSB と NG フェルミオン
- ④ 開放端条件での厳密解
- ⑤ まとめ・今後の展望

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
●0000	0000	oooo	000	0000
目次				

- ② 本研究で導入する模型
- ③ SUSY SSB と NG フェルミオン
- ◎ 開放端条件での厳密解
- ⑤ まとめ・今後の展望

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
o●ooo	0000	oooo	000	0000
詔対称性	(SUSY)			

$\mathcal{N} = 1$ SUSY の代数

- 実超電荷: R = R[†],
- フェルミオンパリティ: $(-1)^{F}$ s.t. $\left\{ R, (-1)^{F} \right\} = 0,$
- $N \in \mathcal{V} \models \mathcal{P} : H = \frac{1}{2}R^2 = \frac{1}{4}\{R, R\}$

Hに対してこのようなR, $(-1)^F$ があるとき、Hは SUSY を持つという。

要するに・・・

H が *R* の 2 乗で表される系を考えるだけ

•
$$[R, H] = 0$$
, $(-1)^F, H| = 0$

• 具体例 (自由粒子): $H = p^2/(2m)$ 、 $R = p/\sqrt{m}$ 、 $(-1)^F = P(パリティ)$

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00●00	0000	oooo	000	0000
超対称性	(SUSY)			

SUSY を持つ系のスペクトラム構造

- H は半正定値、 $E \ge 0$
- E = 0の状態 $\Leftrightarrow R | 0.g.s. \rangle = 0$ と R で消滅する基底状態
- E > 0 の状態 $\Leftrightarrow (-1)^F = \pm 1$ のペアが R で互いに移り変わる:

$$R\left|E,+\right\rangle = \sqrt{2E}\left|E,-\right\rangle, \ R\left|E,-\right\rangle = \sqrt{2E}\left|E,+\right\rangle$$

- 非相対論的な量子力学や格子模型でも考えることができる
 [1] E. Witten, 1982 など
- 本研究ではスピン (マヨラナフェルミオン) による格子模型で SUSY SSB の相図や厳密解を調べる
 [2-4] N. Sannomiya et al., 2016, 2017, 2019

 1: 超対称性の自発的破れ (SUSY SSB)

SUSY SSB の定義

- 基底状態のエネルギー密度 $E_{g.s.}/L > 0 \stackrel{\text{def}}{\Leftrightarrow} SUSY SSB$
 - [2-4] N. Sannomiya et al., 2016, 2017, 2019
 - 有限系では E_{g.s.} > 0 と通常通り
 (⇔ R |g.s.) ≠ 0、H が持つ SUSY 不変性が基底状態にはない!)
- $E_{\text{g.s.}} = O(L)$ で発散し、 $L \rightarrow \infty$ で $E_{\text{g.s.}}$ が定義されない可能性!
- ・有限系で常に E_{g.s.} > 0 でも、無限系 L → ∞ では E_{g.s.}/L → 0 と SUSY
 が回復する可能性!
 [5]E. Witten, 1982

本研究1:

● ある超対称格子模型において、SUSY SSB の相図を調べた

 1
 本研究で導入する模型
 SUSY SSB と NG フェルミオン
 開放端条件での厳密解
 まとめ・今後の展望

 本研究2: SUSY SSB と NG フェルミオン
 アントロダクション
 <

NG mode

- 通常の連続的対称性の SSB: NG ボゾンが出現 非相対論での分散関係の分類理論あり
- SUSY SSB: NG フェルミオン (Goldstino) が出現 非相対論での分散関係の分類理論がまだない

本研究2:

 ある非相対論的な格子模型での、NGフェルミオンとみられる素励起 を平均場近似で見つけた

さらに ...

• 厳密な基底状態を周期境界条件,開放端境界条件の両方で見つけた

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00000	●000	oooo	000	0000
目次				

② 本研究で導入する模型

③ SUSY SSB と NG フェルミオン

◎ 開放端条件での厳密解

⑤ まとめ・今後の展望

本研究で導入する模型(1)

本研究で導入する模型

イントロダクション

 ・以下の1次元ハミルトニアン (g ≥ 0 はパラメ ータ) は超対称性を持つ



SUSY SSB と NG フェルミオン



 $R(g) = \sum_{j} \left(\beta_j + ig\beta_j\beta_{j+1}\gamma_j\right)$



まとめ、今後の展望

開放端条件での厳密解

 $\left(-1\right)^{F} := \prod_{j=1}^{L} \left(-\sigma_{j}^{z}\right)$

10000 ロジャンション きのいて (第入する 機型 SUSY SSB と NG フェルミオン 本研究で導入する 模型 (2)

本研究で導入する模型 $(g \ge 0$ はパラメータ、1 次元 S = 1/2 スピン系)

$$H(g) := \frac{1}{2}R(g)^2 = \frac{L}{2} + g \sum_{j} \underbrace{\left(\sigma_{j-1}^z - \sigma_j^x \sigma_{j+1}^x\right)}_{\text{臨界横磁場イジング}} + g^2 \sum_{j} \underbrace{\left(\frac{1}{2} - \sigma_{j-1}^z \sigma_j^x \sigma_{j+1}^x\right)}_{\text{相互作用}}$$

開放端条件での厳密解

まとめ・今後の展望

マヨラナフェルミオン表示では

$$H(g) := \frac{1}{2}R(g)^2 = \frac{L}{2} + g\sum_{j} i(\beta_{j+1} - \beta_j)\gamma_j + g^2\sum_{j} \left(\frac{1}{2} + \beta_{j-1}\gamma_{j-1}\beta_{j+1}\gamma_j\right)$$

・ 臨界点上の横磁場イジング模型に、相互作用 σ^z_{j-1}σ^x_jσ^x_{j+1} を加えたもの
 ・ 超対称性の手法を用いて基底状態を調べることができる

模型の SUSY SSB の相図

000

本研究で導入する模型

イントロダクション

$$H(g) := \frac{1}{2}R(g)^2 = \frac{L}{2} + g\sum_{j} \left(\sigma_{j-1}^z - \sigma_j^x \sigma_{j+1}^x\right) + g^2 \sum_{j} \left(\frac{1}{2} - \sigma_{j-1}^z \sigma_j^x \sigma_{j+1}^x\right)$$

H = L/2

SUSY SSB と NG フェルミオン

 ● 周期境界条件において↓
 (無限系の SUSY SSB は 境界条件によらない)
 ● 超対称性の
 ● 自発的破れ

開放端条件での厳密解

L

まとめ・今後の展望

g	H(g)	$E_{\rm g.s.}/L$	SUSY SSB	備考
0	L/2	1/2	0	trivial
∞	$g^2 \sum_{j} \left(\frac{1}{2} - \sigma_{j-1}^z \sigma_j^x \sigma_{j+1}^x \right)$	0	×	可解模型 [6]

[6] P. Fendley, 2019

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00000	0000	●000	000	0000
目次				

- ② 本研究で導入する模型
- ③ SUSY SSB と NG フェルミオン
- ◎ 開放端条件での厳密解
- ⑤ まとめ・今後の展望

12×12 (厳密解による上限)

● 周期境界条件かつ g = 1 の場合、ハミルトニアンは以下の通り

$$H(g = 1) = \sum_{j} (1 + \sigma_{j-1}^{z}) (1 - \sigma_{j}^{x} \sigma_{j+1}^{x})$$

- よって以下のような trivial/topological 状態が 0 エネルギー基底状態!
- g = 1で SUSY SSB は起きておらず、 $g_c < 1$!
- 超電荷による消滅条件 $R|0.g.s.\rangle = 0$ からも理解できる



 g_{c} の下限 $\pi/8$ (変分原理による下限)

H(*g*)の基底状態を |g.s.⟩ として変分原理より

$$\begin{split} E_{\text{g.s.}}/L &= \frac{\langle \text{g.s.} | H(g) | \text{g.s.} \rangle}{L} = \langle \text{g.s.} | \left(\frac{1}{2} + g H_{\text{free}}/L + g^2 H_{\text{int}}/L \right) | \text{g.s.} \rangle \\ &\geq \frac{1}{2} + g E_{\text{g.s.}}^{\text{free}}/L + g^2 E_{\text{g.s.}}^{\text{int}}/L = \frac{1}{2} \left(1 - \frac{8}{\pi} g \right) \end{split}$$

⇒ 少なくとも $g < \pi/8 = 0.39 \cdots$ では $E_{g.s.}/L > 0$ で、 SUSY SSB !





 超場形式で導入される SUSY SSB の秩序変数を用いて、SUSY SSB を 自動で検知する平均場理論を構築できる



イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00000	0000	oooo	●00	0000
目次				

- ② 本研究で導入する模型
- ③ SUSY SSB と NG フェルミオン
- ④ 開放端条件での厳密解
- ⑤ まとめ・今後の展望

g = 1 で、開放端条件をとる: このとき、以下の kink 状態が基底状態 (*E*_{g.s.} = 1/2)

$$|\cdots\downarrow\downarrow\downarrow\uparrow_{j}\to\to\cdots\rangle, |\cdots\downarrow\downarrow\downarrow\uparrow_{j}\leftarrow\leftarrow\cdots\rangle \quad (j=1,\cdots,L)$$

● ↑ の位置と →, ← の選び方で 2L 重に縮退、秩序変数も↑ の位置に局在



 $\frac{2}{2000} \frac{2}{2} \frac{2}{2}$

$$|j, \operatorname{kink}\rangle := \frac{1}{\sqrt{2}} \left(|\cdots \downarrow \downarrow \downarrow \uparrow_{j} \rightarrow \rightarrow \cdots \rangle + |\cdots \downarrow \downarrow \downarrow \uparrow_{j} \leftarrow \leftarrow \cdots \rangle \right)$$
$$|j, \operatorname{skink}\rangle := \frac{1}{\sqrt{2}} \left(|\cdots \downarrow \downarrow \downarrow \uparrow_{j} \rightarrow \rightarrow \cdots \rangle - |\cdots \downarrow \downarrow \downarrow \uparrow_{j} \leftarrow \leftarrow \cdots \rangle \right)$$

• これらは超電荷の作用によって入れ替わる SUSY のペアを成す:

 $R(g = 1) |j, \text{kink}\rangle = -|j, \text{skink}\rangle$ $R(g = 1) |j, \text{skink}\rangle = -|j, \text{kink}\rangle$

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00000	0000	oooo	000	●000
目次				

- ② 本研究で導入する模型
- ③ SUSY SSB と NG フェルミオン
- ◎ 開放端条件での厳密解
- ⑤ まとめ・今後の展望

1ントロダクション 本研究で導入する模型 SUSY SSB と NG フェルミオン 開放端条件での厳密解 まとめ・今後の展望
 このの まとめ・今後の展望
 まとめ・今後の展望

まとめ

- g = 1 で周期境界条件を取ると、基底状態は triv/topo が縮退
- SUSY SSB の転移点 g_c の上限 · 下限を求めた、 $\pi/8 \le g_c \le 1$
- 超場形式 + 平均場理論によって SUSY SSB 及び NG フェルミオンの 出現を定性的に捉えた、線形分散の NG フェルミオンが出現

• g = 1 で開放端境界条件を取ると、基底状態は kink/skink が縮退

今後の展望

- NG フェルミオンの分散の次数を諸不等式により一般に定める
- 平均場理論を空間的に不均一な秩序変数に拡張
- kink-skink 解における NG フェルミオンの出現を調べる
- Witten 指数の活用

イントロダクション	本研究で導入する模型	SUSY SSB と NG フェルミオン	開放端条件での厳密解	まとめ・今後の展望
00000	0000	oooo	000	oo●o
超場形式				

• マヨラナ超場
$$B_j(t,\theta) := \beta_j(t) + \theta \sqrt{2} F_j(t), \quad \Gamma_j(t,\theta) := \gamma_j(t) + \theta \sqrt{2} G_j(t)$$

超場による作用の表式

$$S = \int \mathrm{d}t \int \mathrm{d}\theta \sum_{j} \left(\frac{1}{4} B_j \mathcal{D}B_j + \frac{1}{4} \Gamma_j \mathcal{D}\Gamma_j - \frac{1}{\sqrt{2}} (B_j + \mathrm{i}g B_j B_{j+1} \Gamma_j) \right)$$

$$S = \int dt \sum_{j=1}^{L} \left(\frac{1}{4} \beta_j i \dot{\beta}_j + \frac{1}{4} \gamma_j i \dot{\gamma}_j + \frac{1}{2} F_j^2 + \frac{1}{2} G_j^2 - F_j \{ 1 + g(i\beta_{j+1}\gamma_j - i\beta_{j-1}\gamma_{j-1}) \} - gG_j i\beta_j \beta_{j+1} \right)$$

超場形式による平均場近似

•
$$F_j = \{R, \beta_j\}/2 = 1 + g(i\beta_{j+1}\gamma_j - i\beta_{j-1}\gamma_{j-1}) = 1 + g(\sigma_{j-1}^z - \sigma_j^x \sigma_{j+1}^x),$$

 $G_j = \{R, \gamma_j\}/2 = gi\beta_j\beta_{j+1} = -g\sigma_j^y \sigma_{j+1}^x$
と F_j, G_j は無限小超対称変換

• 有限系で SUSY unbroken とすると $R | g.s. \rangle = 0$, $\langle g.s. | R = 0$ $\Rightarrow \langle F_j \rangle_{g.s.} = \langle G_j \rangle_{g.s.} = \langle g.s. | \{R, *\} | g.s. \rangle = 0$

対偶により

有限系で $\langle F_j \rangle_{g.s.} \neq 0$ または $\langle G_j \rangle_{g.s.} \neq 0 \Rightarrow$ SUSY SSB 有限系において、 $\langle F_j \rangle_{g.s.}$ や $\langle G_j \rangle_{g.s.}$ は SUSY SSB の秩序変数

• 無限系でも、 $\langle F_j
angle_{ ext{g.s.}}$ や $\langle G_j
angle_{ ext{g.s.}}$ の空間平均は秩序変数として機能